

ドガの風景画における人物の風景化

藤本奈七（関西学院大学）

ドガ(Edgar Degas, 1834-1917)は、同時代の画家たちが自然の光に関心をよせ、戸外制作に熱中していたあいだに、踊り子やカフェといった室内で展開される近代生活のモチーフを好んで描いていた。しかし、そのドガも同時代の画家たちと同様に風景画を制作している。本発表では、そのなかでも、特定の時期にみられる彼の特殊な風景画に注目する。

《険しい海岸》(1890-93年)は、ドガが風景画を集中的に制作していた3つの時期のうち2番目の時期に制作されたものである。この作品には、起伏のある風景が描かれているが、左に回転させると、画面内に《髪を結われる女性》(1886-88年)とよく似た姿が浮かび上がる。このことは、すでに先行研究でも言及されている。また、隠されたモチーフが画面内に描かれる例は、同時期の風景画からも確認できる。ケンドールは、この時期の風景画にみられる人物の形態が、実景あるいは空想の風景とよく似たものになった理由について、当時は一般的であった文学における擬人観との関係を指摘した。たとえば彼は、アミエルの『日記』(1885年)やドガの友人でもあったモーパッサンの『女の一生』(1883年に初版)における女性身体の風景化に関する表現に注目し、文学による影響を示唆している。しかし、上記の文献をドガが読んでいたという記述はみつかっていない。また、この時期以前や以降もドガは風景画を制作しているが、それらの作品には擬人表現はみられない。ではなぜ、このような表現がこの時期の風景画に限って確認できるのだろうか。

この作品は、相反する制作姿勢が同時に并存していた時期に制作された。ドガは1890年にバルトロメとともにディエネへ旅行し、その道中の馬車の窓からみた実景をもとに風景画を制作している。それらは、モノタイプの上からパステルを用いて制作されており、実景との類似がみられるものが多い。一方で、1892年に制作された作品は、同じ版から刷られたものにパステルを用いるという同じ技法を採りながらも、実景とは全く違う風景を描いており、そこには風景を新しく創造しようとする傾向がみられる。つまり、《険しい海岸》は、実景を重視する風景表現と並行して、画家の想像力によって創造される風景が描かれるようになるという状況のなかで制作されたのである。

《険しい海岸》が制作されたのは、ドガが風景を想像力によって描き始めていた時期であることを踏まえつつ、本発表では、《髪を結われる女性》と類似するこの時期の作品《髪型》(1892-95年)と、何人ものスードの女性を風景に横たわらせている作品である《水浴びする女性》(1890-95年)を採り上げ、人物が風景に融解していく過程を考察する。また、レフが指摘した1870-80年代にみられる人物と背景の曖昧化にも注目し、ドガの作品制作の流れのなかで、《険しい海岸》にみられる人物の風景化が、人物と背景の曖昧化の延長上にあることを明らかにしたい。